ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

　けたけましく鳴り響く目覚ましを止め、俺は目を擦りながらも起き上がる。

　ボーっとする頭が、窓から入る光で少しずつ覚醒していく。

　そして、気がついた。

「……おい」

「……ふみゅぅ？」

「なんでいる？」

　おかしい。昨日寝るときは、確かにこの部屋には俺しかいなかったはずなのだが……何故か俺の隣では、樹葉が、俺と同じように眠そうな目を擦りながら俺を見つめていた。

「…………」

「…………」

「……えへへ」

「えへへ、じゃない！　ほら、着替えるから出た出た！」

　まだ眠そうな樹葉を部屋から追い出し、扉を閉める。ちょっとむくれていたが、知ったことじゃない。

「はー……」

　扉に寄りかかりながら、俺は長く息を吐く。

　あの戦いから、数日が過ぎた。

　捕まった木藤は、『スカル・フォーゼ』という『チーム』の一員だった。『スカル・フォーゼ』は他の『チーム』にスパイとして送られ、その『チーム』を内部から破壊していき、最終的には全ての『チーム』を支配することを目的とした『チーム』である。

　本当はもっと早くお姉様を始末し、『ワルキューレ』を潰す予定だったらしいのだが、俺の持つ『ヘブンズ・ギア』と『ヘルズ・ギア』を奪うために、色々と工作していたようだ。闘悟との一件は、まんまと木藤にしてやられたわけである。

　まあそれを抜きにしても、闘悟が『トラース・ブレイカー』にいるのは間違いがないのだが……結局、あいつにその理由を聞けず仕舞いになってしまった。

　どうもレイがその理由をしっているっぽいのだが、質問しても適当にはぐらかされて、今でも分かっていない。まあそこについては、今度あいつにあった時にでも聞いてみようと思っている。

　俺はジャージに着替えてから、一言樹葉に声をかけ、外に出る。朝練だ。

「およ？　ロランじゃん。おはよう」

　外に出たら、俺と同じくジャージ姿のレイがいた。彼女も朝練なのだろう。

「おはよう。レイも朝練なら、一緒に走るか？」

「あー、いいね。一緒に行こうか」

　ちょっと驚いたような顔を何故かされながら、それでも少し嬉しそうにレイは頷く。

　何でそんな顔をするんだろうな、と思って、やっと気がついた。

　そう言えば、こうして誰かと一緒に朝練するのは初めてだ。

「俺、結構走るほうなんだけど、ついてこれるか？」

「言うねー。私も走るほうよ？」

　俺達は揃って、ニヤリと笑う。

「先にバテた方が負けな？」

「負けた方が、商店街のたい焼き一個奢りってことで」

「オーケー。んじゃ、そういう事で。コースはレイに任せるよ」

　そして、俺達は走り出す。

　そして、一時間後。

　正直、ちょっとレイを舐めていた。あいつ、思いの外体力あるなって思った。

　とは言え、こちとらあの重い刀を振り回し続けるために鍛えている身だ。僅差だったが、先に根をあげたのはレイだった。

「だー……つっかれたー……」

「うへー、もうちょっと粘ってたら、私が勝ったのかな？」

「ま、でも、勝ったのは俺だ。たい焼きよろしく」

「はいはい。じゃ、今日の放課後にね」

　そんなことを話しながら、俺達はマンションに入っていく。

「あれ、二人とも、今日は一緒だったんですか？」

　すると、詠と鉢合わせた。ジャージを着ているところを見ると、どうやら詠もこれから朝練のようだ。が、

「詠って、ランニングするんだな」

「しますよ？　一応、最低限の体力はつけないといけませんし」

　ちょっと心外そうな声を出す詠。

「ていうか、二人ともずるいです。走るなら、誘ってくれればよかったのに」

「いや、それはない」

「私ら、結構走るよ？　ついてこれる？」

「んぐっ……」

　俺達ほど体力がない自覚はあるようで、何か言いたそうにしながらも、押し黙る詠。

「っ、行ってきますっ！」

　そう言って、外に出て行った。「もうちょっと走る距離増やそうかな……？」なんて声が聞こえたが、まあ頑張って欲しい。

　出来ることなら、詠と走るのも楽しそうだ。とはいえ、

「ま、期待はしないでおくわ。一朝一夕で何とかなるものでもないしな」

「だねー。何年後になるかなー？」

　そう言いながらも、レイはちょっと楽しそうだった。

「てかさ、ロラン」

「ん？」

「時間大丈夫？　朝練終わったら、樹葉ちんと朝ごはん一緒に作るって昨日言ってなかった？」

「あ、そうだった！」

　いかんいかん。朝練に夢中で、時間を忘れていた。

　てか、おいおい――

「もう七時じゃんっ？」

　時計を見ると、もうすぐ七時で、これは絶対作り終わっている気がする。すっぽかしたら、後で何を――本当に何を――言われるか分かったものじゃない。

　本来ならこれから少し素振りもする予定だったが、そんなことを言っている暇もない。

　疲れた体に鞭を打って、慌てて階段をかけ上がり、部屋の前まで全力で走る。

　走りながら、俺は思う。

　大変なこともあるだろう。

　辛い事もあるだろう。

　何故なら、闘悟と、本気で戦わないといけない時は絶対来るから。

　昔はともかく、今は、そして未来の自分は、あいつと戦うことに、きっと抵抗を感じるだろう。

　でも、それでも。

　樹葉、レイ、詠、そして海斗の顔を、順に思い浮かべる。

「樹葉、悪い！　遅くなった！」

「ローラーン？」

　部屋に入ると、テーブルの上には既に朝食が並んでいた。

　樹葉はニコニコと、しかし中々に凄みのある顔で、俺を見ていた。

　あー、完全に怒ってるなー……。

「は、ははははは……」

「……ふふっ」

　あ、これはヤバいんじゃなかろうか。

　第六感が、そう告げる。

「ロラン、今日の夜は、私の部屋で寝ない？」

「わ、分かりました――って、はいぃ？」

　なんかとんでもない要求をされた気がして、俺は聞き返す。

「だから、約束すっぽかしたお詫びに、今日の夜は私の部屋で寝てね、って言ってるの」

　これ絶対何かされるやつだー！

　うへー、と思いつつも、

　新しく出来た仲間達との日々は、きっとそれ以上に楽しいと、俺は確信していた。